2001年の高知県豪雨災害と復興努力

2001年9月、足摺宇和海国立公園を含む高知県南西部では豪雨による大規模な地滑りが起きました。災害そのものは自然災害でしたが、その影響は過去にこの地域で人々が選択した多くの行動によってより深刻なものとなってしまいました。

[キャプション]

1950年代から1980年代にかけて土佐清水地方では観光業が盛んになり、それに伴いいくつかの大規模開発プロジェクトが始まりました。その結果、盛んに工事が行われ、汚染が進み、さらに広い範囲で生活排水が海に流されたことも加わって竜串湾の水質は徐々に悪化しました。

1990年代には、近隣の山々の自然林が次々と伐採され、伐採後は植林が行われました。

水質の低下と自然林から人工林への移行の間には一見何のつながりもないように見えますが、そのどちらもが2001年豪雨災害の影響を深刻化させました。手入れが不十分な人工林では地滑りが起きやすくなっており、地滑りにより多数の家屋や田畑が埋まって甚大な被害がもたらされました。

そして地滑りの多くが海まで達し、すでに汚染されていた海水に大量の土砂が流れ込みました。これにより海の生態系の破壊が進みサンゴの死がもたらされました。

竜串における災害復興

[キャプション]

竜串の人々は2001年の災害から多くの教訓を得ました。その一つが、湾内の余分な泥土を除去して湾を浄化し、海の生物に再生の余地を与えることの重要性を学んだことです。

地域住民たちは、近隣の森林をより健康で復元力に富んだものにしようと定期的な間伐も始めました。

マップを見ると、サンゴ再生を助ける活動の効果が出ていることがわかります。